

## 一一ノ二三、安政大地震の記録 総括

**解説** 安政元年（一八五四年）に木津川断層（上野盆地北側、多羅尾方面の山々が断層崖）、桑名四日市断層（四日市西方を南北に走る）、花の木断層（伊賀上野から月ヶ瀬方面にのびる）という三つの断層が同時に活動したことに起因する大地震が発生し、山城、大和、河内、和泉、摂津、伊賀、丹波、近江、越前、紀伊、尾張の諸国で大きな揺れが感じられた。特に震源に近い伊賀上野、四日市、奈良、大和郡山付近は大きな被害を被った。そのエネルギーはマグニチュード七・二五前後と推定されている。ちなみに平成七年の阪神淡路大地震はマグニチュード七・三、平成二十三年の東北地方太平洋沖地震は同九・〇であった。

震源に近い笠置から上野、島ヶ原、大河原の辺りはとりわけ被害が大きく、山々より大石が転がり出て人家を押しつぶし、所々から泥水が二〜三尺も湧き出し、家や田畑共泥に浸り、または地中へめり込む家も生じたと記される。

衰退に向かっていた笠置寺にとつての被害も大きく、以後の笠置寺運営にも大きな影響を及ぼした。

安政の大地震は、安政年間（一八五〇年代）に、日本各地で頻発した大地震を総称するが中でも、特に安政二年に発生した安政江戸地震を指す事が多い。伊賀地方を襲った大地震はこれら安政年間に頻発した大地震の先駆けで、嘉永七年六月に発生した。嘉永七年はその十一月に安政に改元されているので、本来は安政大地震と言うのは正確ではないかも知れないが、安政の年に発生した大地震として一般に伊賀大地震を含めて安政大地震と称されている。

### その一 古地震、歴史資料と活断層からさぐる（東京大学出版会、一九八二年）から抄出

#### 一、発生

日 安政元年（嘉永七年、一八五四）六月十五日（新暦七月九日）  
時 伊賀上野で十五日午前二時前。同午前七時。十七日午後一時  
四日市で十五日午前一時から二時 同午前六時過ぎ余震  
奈良で十五日午前〇時及び二時 午前七時

以上、上野盆地、笠置山地および奈良盆地を除く大半の地域では、十五日の〇時から二時の間に本震、同日早朝六時から八時の間に最大の余震を感じたのに対して、上野盆地では余震を本震と同等に、また笠置山地および奈良盆地では早朝の余震を本震と同等またはそれ以上に感じたということである。

この複雑な地震の揺れの原因は午前二時に木津川断層系の活動で本震≒七・二の地震が生じ、ほぼ同時の午前二時前後に四日市断層の活動で≒六・七の地震が生じた。更に午前七時ないし八時に木津川断層の南にある花ノ木断層で余震≒六・八が誘発されたと見る。

その二、地震に遭遇した者の記録

伊賀上野 儒官猪飼貞吉ノ状、村上真輔宛（西尾市立図書館岩瀬文庫蔵 嘉永甲寅六月地震記よ

り）概要

（前略）

当地六月十三日八時前大地震、皆々庭上へ出て候共、格別の震にも無御座候。相続八時過と相覚へ又一震。是通例より大にて子ねり塀損候処も御座候。夫より西の方より不絶地ひゝき有之。時々小震御座候故、或は京撰の間、大地震にて其の余波にも可有之哉。何れ不油断と相共に警戒、其の夜は寝不申候。

十四日に至り地ひゝきは不絶有之候え共、格別の震無御座、人心稍怠り候処、其夜八ツ時前に至り忽一震、天地一時に覆るか如く、実に前代未聞の大震、譬へは物に突当候て蹴上げ候様の震にて、凡そ三尺斗もゆり上げ候様相覚候。

小生方兩人の男児、兄は九歳弟は三歳、無人の小家に候故、平生より火急の節は兄の方小生抱き、小児は家内抱き遁候様申含置き候事故、小児を家内直に抱き漸く蚊張を出ると直に、寝所夜具の上へ壁倒れ、小生は倅を抱き、縁先へ下り候と直に、壁材木等足先へ倒れ掛り、其上をふみ相通れ申候。家は忽奥通り惣崩れ、僅に表の座敷一間大破にて残居候。今一足の遅促にて不免死候処、天幸にて相逃申候。外に崩れ候家も初め一ゆり二ゆりにて倒れ候故、中々遁れ出候暇無御座候。（中略）

十四日より日夜大小震ひ通し、就中十五日曉六半時、十七日九半時比、廿一日は迅雷暴風の上其の夜五時比、此三度は十四日夜と同様の大地震に御座候。日夜度数睨と数へ不申候へ共、二百度にも及可申候。其の後追々間遠に相成且小震に相成、此比は一夜に十度程に御座候。最早強弩の末格別の事有御座間敷と奉察候。（後略）

勢州津町年寄 岡嘉平次来状（西尾市立図書館岩瀬文庫蔵 嘉永甲寅六月地震記）

当地儀十三日午ノ刻頃地震、夫より夕立に相成、雷鳴五、六声直に晴、未刻頃又々地震。十四日快晴の処、夜中丑ノ刻大地震。夫より夜明迄二十五度も震申候。石灯笼墓杯は大体倒れ申候。所々破損、寺の門一ヶ所、建家一ヶ所、立塀所々倒れ申候。一五日朝六つ時過、又候大分の大震二度、夫より続けてゆさゆさ不絶。（後略）

六月二十日（前略）昨九日午半頃大分震、夜丑刻過大震御座候。扱々いつまでも油断相成不申、心痛仕候。先夜前の震は去る十四日丑刻一番、十五日朝六ツ時過二番、昨九日夜丑刻過三番とつゝ、き可申位の一物に御座候。（後略）

幕末風聞記脱漏（奈良県立図書館蔵）

（嘉永七年）甲寅六月十四日大地震之事

（前略）扱そも水無月十三日朝より八ヶ度ほど少き地震しけれど、斯る事はつねなりとおもひ居たりしが、十四日の子の刻斗り二大にゆり出し、今にも住家の倒るへきかとお

とろき寝もならず居たりし所、丑之刻斗ニ同しくゆり、猶も恐怖せしが、暫くしてさつと一と雨したるに、是にて地震も鎮るへしと、家内男女うち集安座しかねて居たりしに、夏の夜みしかき二頓て夜ハほのほのと明わたりけるに、辰の上刻斗に前の両度引かへて、烈しくふるひ宇宙震動し、恰も大洋を小船ニ乗て激浪ニ漂ふかことく、梁柱のぎしる音半時斗にて鳴もやまず、いつの間ニか庭の石燈籠は倒れ、戸障子もはづれ、燈火消えしも知らず、只蚊屋の内に俯伏し、思はず念仏を唱へ、此上ハ神や仏を願ふにしかしと、みなみな周章狼狽し、いつ迄ゆるとも知れされは家の内ニハ居かたしと、おののきながら立いでて、空地へ筵戸板など敷ものとし、人々面を見合せて溜息ついて居たりしか、(中略) 扱又十四日兩度の地震ニ市中の所々家土蔵数多倒れ、共外寺院堂舎も倒れ、あるひはゆかみたるもあり、是かために圧死せしもの数知れず、或ハ手足をひしかれ背骨を打、死といへとも葬るものもなく、僧も来らず、棺ニ入りしまゝ宅に置き三日斗りも後葬るもあり。

爰に近在古市村ハ去冬より東の山手ニ地を掘り、つゝみを築き、いかなる早にも用水足りぬと言ひし所に、斯る地震ニ新造の堤崩れ洪水村中へ漲り来り、夜中の事ゆへ斯とも知らず臥たりしを、水と地震に家屋は倒れ、是にも数多死亡せしとぞ。然るに此地ほり穿し時土中より鏡剣など出たりしハ、まさしく古墳にてありしを掘あはきしにより、崇ありしなど世に評しあへり。(後略)

### その三、上野城の被害 (安政伊賀上野地震の城郭被害 盆野行輝 二〇一八年)

震源地に近い京都府南部から伊賀上野周辺が最も大きい被害を被ったが、中でも木津川断層崖に近い上野城の被害は大きかった。その被害状況は「伊州御城下破崖損所絵図」に詳細な被害状況が残されている。三重県鈴鹿地域防災総合事務所盆野行輝氏によりその分析がなされているのでこれにより被害状況を見てみる。

天守閣 城郭建設途中に大風で倒壊しており当時存在せず

東西大手門 日本最大級であったが石垣もろとも倒壊

櫓 十棟あったが二重櫓二棟倒壊。角櫓大半堀中へ沈むその他も崩壊同様

城代屋敷 ほぼ全滅

石垣 高石垣は若干の損あるも無事。その他に石垣膨れ見られる

地面 液状化現象や地割れ、地滑り

城内侍屋敷 七〇八割倒壊

### その四 全体の被害状況

被害状況を取りまとめる機関や役所がまだ存在しない時代の大地震であり、全体の正確な被害状況は把握が困難であるが、死者九九五名。うち伊賀上野付近の死者は六二五名、負傷者九九四名、家屋倒壊二二七〇戸、蔵倒壊三〇六件、全体の被害は倒壊

家屋五七八〇戸、死者一三〇八名と推計されている（日本被害地震総覧）

その五 庁事類編（藤堂藩正式記録中地震関連中重要と思われる部分から概略抜き書き）。

要点

嘉永七甲寅年（一八五四年）

- 一、倒壊家屋などの取り片付けは七月一日に終わった。
- 一、寺院の破損により参拝は取りやめ
- 一、七月五日、十一日、二十七日、二十九日、十二月二十七日に復興資金が与えられる
- 一、七月五日、職人などへの賃金は定めを通り行うことの定め。支払いが滞っていたのか
- 一、七月六日、仮家建築を許可。敷地は以前の地所でなくても良いこと
- 一、七月十六日、木材値段高騰しており、津表にて手当するので申出ること
- 一、七月十七日、けが人は医師の診察を付けて申し出よ
- 一、七月十八日、けが人には見舞金を出す旨
- 一、七月三十一日、堀立長家棟上げ
- 一、八月二日、廣禪寺にある位牌類損した旨の旨申し出あり
- 一、九月二十一日、城内建物類取片付に取掛り

安政二乙卯年（一八五五年）

- 一、四月二十四日、京橋（城の南西にある）仮の修復出来、通行可となる
  - 一、四月十一日、上行寺修復され参詣可となる
  - 一、五月六日、講堂修復でき来る十一日朝開講
- 安政三辰年（一八五六年）
- 一、八月六日、他所から来た諸職人は今年限りとする旨の通達

以上倒壊建物の取り片付けは七月一日には終わり、職人を他所からも入れ、藩からは見舞金も出て本格的に復興への歩みを始めた。

被害の大きかった城内の復興は少し遅れた。藩の正式記録である庁事類編は本来毎日の事項を丹念に記述していくものであるが、地震発生から半月、七月一日までは記載できなかった。藩の混乱ぶりを表している。城内の整備が本格的に整うにはほぼ三年を要し、他所からの諸職人は今年限りとする旨の通達が出た時は既に三年を過ぎていた。

基本的に藩の支援を期待していた笠置寺の復興は城内の再建遅れが影響して、再建の為には地元の協力と修理山の伐木に頼らざるを得なかった。

その六 笠置寺の被害（郷土資料館寄託文書三二八号）

震源地に近かったため笠置寺の被害は大きく、衰微に向かっていた寺に大きな打撃を与えた。住僧も山上に住む場所がなく一時期 麓の末寺に仮住いを余儀なくされた（三二八

号)

慣例上堂の修理は藩の手によって行われてきたが、前述の通り上野城も大きな被害を受けており、すべて藩に頼ることも出来ないため、相当自力や檀家の力も借りて再建に邁進した。

この頃笠置寺には三院とも住持は在職していたが、その後離寺する住持もいて万延元年（一八六〇年）には三院とも無住となっていた。文殊院（実際には福寿院）再建の労を執ったのは住持に代わり麓の有力者達、特に大倉一族であった。

笠置寺の地震被害は

本堂 大破

椿本神社 大破

宝蔵 倒壊

護摩堂 倒壊

福寿院・文殊院・多聞院 倒壊

十三重塔 崩壊

胎内くぐりの天井石 天井より滑り出て谷に落ち込む

名切石 九十度回転して元弘戦死者名土中に隠れる

多聞院石垣 崩壊

行場道 山崩れ

とほぼ壊滅状態となった。

### その七 笠置寺の復旧状況

笠置寺は被害状況を調査して六月二十五日に古市奉行所に報告し、早速検分の役人が二人来山したが復興への行動は遅々として進まなかった。

以下の記録は郷土資料館寄託文書による（以下番号のみ）

安政元年（一八五四年）

一、六月二十五日 笠置寺の被害状況を藩に報告（二二八号）

一、七月二日 藩北代官所より破損所検分あり（二二八号）

一、八月九日 山内破損ヶ所片付（二二八号）

一、八月二十六日 宝物掘り出し（二二八号）

安政二年（一八五五年）

一、七月八日 普請願提出。その詳細は不明（二二八号）

一、九月一日 古市事務所より破損所見分（二二八号）

注、以上を見るに地震発生後現況調査の初動は早かったが、上野本城の甚大な被害もあり、その復旧は遅々として進まなかった。

安政三年（一八五六年）

一、四月 行場道普請人足の寄進願い（二七二号）

一、二月十三日～十九日 古市役人普請用伐木切取り検分（二二八号）

安政四年（一八五七年）

一、三月 石垣寄進明細（二七六号）

一、八月 多聞院風にて倒壊（二二八号）

一、文殊院屋根差し替え（二二八号）

万延元年（一八六〇年）

一、三月 古市役所より本堂、椿本社、釣鐘堂共見積書の通りに早く取りかかるよう

にとの指示（三三五号）

注、三年目から四年目にかけて高台の多聞院（毘沙門堂）を取り巻く石垣は復旧された。多聞院も再建されたようだが、多聞院はまたまた台風によって倒壊した。文殊院の屋根差し替えは応急処置であろう。

慶応二年（一八六六年）

一、三月 諸堂修復の為の伐木売却明細出る（四九号）

一、万延元年（一八六〇年）三月 藩からの通知状（万延元年 一八六〇年三月三三五号）

過日見分した本堂、椿本社、釣鐘堂について見積書の通り早々に取りかかるようにとの指示書である。既に震災後六年ほど経っている。宛先は御留守居僧とある。このとき正式住持はいなかったようである。この指示も村役人へ向けられている。

一、元治元年（一八六四年）十二月 修復資金捻出のための立木伐採願い（三二八号）

震災十年後、一八六〇年藩の指示にもかかわらず復旧は進まず、大破したが倒壊を免れた本堂、鎮守社、倒壊した宝蔵、護摩堂、三院、これらの建物は時節柄普請もならず、住僧も末寺に住まいする状態になっていたところ、このほど藩の厚情により一院（多聞院か）の普請となり、山上にて住まい出来るようになった。追々参詣人も増えだしたが山内見苦しく、時節柄三院付の修理山の雑木を伐木し、その資金で些かなりとも修理資金といたしたく伐木を御許容いただきたいと願っている。

一、慶応元年（一八六五年）五月 笠置山寺普請と称して文殊院（実際は福寿院）の普請が始まる。（三〇六号 「笠置山寺御普請ニ付仕替銀御願帳」）この頃も笠置寺三院は

無住で普請の采配を振るつたのは麓の大倉善右衛門であった。

#### 一、個別の建物再建状況

本堂 記録はないが藩の援助で修理か

椿本神社 所有山林の伐木で費用を捻出し修復（寺院修理ニ付伐木願書二九一他）

宝蔵 震災の翌月に倒壊した宝蔵から歴代の宝物の掘り出しが行われた。梅雨の頃であり、宝物の毀損を防ぐため早期に作業する必要があったのだろう（二二一八）

その後復旧は叶わず、明治になって宝蔵跡には楓の木が植えられ紅葉のきれいな公園として復活した。宝物庫が庫裏前に建築されたのは昭和五十五年である。途中第二次大戦の混乱期があったとはいえ震災の傷跡が完全に癒えるには一世紀半の歳月を要したことになる。

護摩堂 復旧出来ず、今は本堂裏の高台の林に埋没

福寿院 文殊院の名のもとに再建（笠置山寺御普請ニ付仕替銀願帳三〇六号）

多聞院 再建

文殊院 復旧出来ず、笠置寺所有の畑になった

十三重塔 檀家の力を借りて組み直し

胎内くぐりの天井石 切石を使った人工の覆いで再建

名切石 そのまま放置。

多聞院石垣 檀家の寄進で再建（笠置山石垣寄進帳。二七八号）

行場道 地震発生から三年弱の安政三年四月笠置寺より行場道繕普請人足御寄進覚書が発状された。

地震で諸堂寺坊共倒れ、その上行場道は所々崩れ落ち参詣の人の通行も出来ない状態で迷惑をかけている。諸堂や寺坊は藩の手で普請する意向であるが、行場道までは手が届かない。檀家の皆様も地震の被害を受けておりお願いできる筋ではないが、参詣の方々に空しく下山させるのも心外であり、早々に修繕する必要がある所以他力の御寄進を願うところであると縷々願い上げている。

これに対して麓の南笠置の有力者を始め、上・下有市村、広岡村（府県境の奈良に所在）、切山村から金銭や人足の提供を受けて、行場道や胎内くぐりの笠石、十三重塔の組み立てなどを行った（二七二号）。

以上